

海外留学のすすめ

加藤 秀之

筑波大学心臓血管外科

Because It's There

Hideyuki Kato

Department of Cardiovascular Surgery, University of Tsukuba, Ibaraki, Japan

心臓外科医の朝は早い。Canada は大らかな土地柄で人々は比較的ゆったりとした生活を送っている印象があるが、そんな国であっても Toronto の The Hospital for Sick Children, 通称 Sickkids, の朝の ICU 回診は 6:45 に始まる。冬であれば日が短いので外はまだ暗い。2010～2013 年の 3 年間この Sickkids で Cardiovascular Surgery Fellow として勤務した。はじめは Research fellow として入りその後 Clinical fellow としてお世話になった。Clinical fellow での経験は非常に有益で今の自分の診療に大きな影響を与えている。ICU の Intensivist たちと回る早朝の ICU 回診から始まり、その後手術室に向かう。基本的には手術室が勤務の場となる。Sickkids では当時年間約 600 件の CPB 症例があり毎日並列で手術を行っていた。Clinical fellow は術者か前立ちとして手術に携わる。手術は基本的に Staff と Fellow または Resident の 2 人のみで行う。手の空いている Fellow は外来で翌週、翌々週の手術の IC を行う。Staff は当時 Dr. Glen Van Arsdell, Dr. Osami Hojo, Dr. Christopher Caldarone, Dr. John Cole がおり、Resident/Fellow は自分を含め 4 人いた。Staff-fellow が 4 組できてそのうち 2～3 組はその日の手術を担当するような形になる。組み合わせは月単位で変えていく。毎週金曜は成人先天性心疾患の手術があり、1 組は道路を挟んで反対側にある Toronto General Hospital で成人先天性の手術を行う。Staff は皆熟練で知識が豊富でかつ教育者であった。難しい症例も多く手術手技はもちろん、多くのことを学んだ。未だに手術術式や手技の判断に迷うような症例は当時つけていた手術の記録や記憶が非常に役に立っている。Resident/fellow 4 人で In-house call（つまり当直）と Transplant call を回していく。

Transplant call は心臓移植のための臓器を取りに行く役目だ。時間との勝負なので小型飛行機で移動して Retrieval（ドナー心臓の摘出）を行う。何故か毎回乗ると必ず Subway のサンドイッチを渡された。一度近場に臓器をとりに行くのに警察車両（いわゆるパトカー）の後部座席で移動したことがあったが、後部座席は鉄格子がはめてあって護送されている気分では、車両は尋常ではない速度で走るだけでは二度と乗りたくないと思った記憶がある。サンドイッチはもちろんついてこない。印象的な症例はたくさんあったが、一つは 30 年前に Dr. Mustard が Sickkids で行った Mustard 手術の再修復を Glen と行った症例であろうか。連綿と続く歴史や伝統を感じずにはおれぬ症例であった。

Toronto の生活はちょうどいい都会度で快適であった。基本的に晴れの日が多く夏場は非常に過ごしやすかった。Ontario 湖のほとりで飲む Tap Beer は最高だった。夏は日が長く夜 8 時くらいまで明るいのでついつい飲みすぎてしまう。

Toronto で多くを学び判断に迷いが少なくなってきた後、もう少し修行して自分の手技・判断に自信を持ちたかった自分は新天地を探した。ちょうど Fellow を探していた Vancouver の British Columbia Children's Hospital, 通称 BC Children と運よく話がまとまり 2013～2016 の 3 年間 Clinical fellow として勤務した。この BC Children は年間 250 例の CPB 症例があり、Sickkids よりは数が少ないものの Staff は Dr. Sanjiv Gandhi, Dr. Andrew Camp-

bell の 2 名で Fellow は自分の 1 名のみという環境であったため手術に入る症例数は Sickkids より多くなった。Staff 同志が 2 人手術に入ることは基本ないため、BC Children の心臓外科手術症例すべてに自分が術者か前立で入る形であった。毎日 On-call ではあったがその分 In house call はないので多忙を極めるというほどではなかった。術後は Sickkids 同様 ICU にいる Intensivist たちが管理してくれるので重症例は共に見ていく形にはなるが基本手術が終わって安定していれば夕方には自宅に帰って家族と一緒に夕飯を食べる毎日であった。おかげで私生活も充実させることができた。Staff はこちらも熟練した技術をもっており、特に Sanjiv は手術が正確で速く、成績も非常によかった。新生児の Arterial switch operation が正午に終わって、術後 4 日目で退院しているのを目の当たりにして世界は広いと実感した。当時の彼の手技から学んで自分のものにしたものも多く現在の自分の手技の確立に大きな影響を与えている。

Vancouver は西海岸にあり Toronto よりもさらに大らかな土地柄で人々は大いに人生を楽しんでいる雰囲気があった。職場の誰もが何らかの形で体を動かす趣味があり特にアイスホッケーは猫も杓子も嗜んでいるような環境であった。各病院にアイスホッケーのチームがあり年に 1 回 BC 州内の医師だけが参加できる大会が催された。BC 州の人口は 500 万人程度なのに医師のみの参加で 25~30 チームが参加すると聞けばその Hockey 熱の異常さを感じてもらえるかもしれない。自分も偶然大学時代にアイスホッケーをやっていたこともあり参加して非常に楽しい思いをさせていただいた。Vancouver の市街地から車で 30 分の所に雪山が 3 か所あるので仕事を早めに終わらせて夕方スキー/スノーボードも可能であったし、冬季 Olympic のあった Whistler まで車で 1 時間半ほどなので本格的に遊ぶにも最高の環境であった。Whistler は山 2 つ分丸々スキーリゾートなので 1 日では全て回るのが不可能な程の広さであった。Vancouver の市街地は温暖で、雪山が近いのに市街地に雪が降ることは年 1 回程しかなかった。そのため非常に過ごしやすい環境で今考えると贅沢な生活だったなと思える。

海外での経験は今の自分の心臓外科としての診療に大きな影響を与えている。判断に迷ったときや困難と思える症例に当たった時の大きな拠り所となっている。技術や知識を得られたことはもちろんだが仕事と家族のあり方や人生を謳歌する考え方、国や人種に関する考え方など人生観も大きく変わった。海外に行こうか迷ってる若者がいたら何のためらいもなく行きなさいと薦めるだろう。行くまでの苦労や行ってからの苦労もあるが、それすら後々の財産になる。しかし逆に海外に行くことを人生の目標にしないでほしい。そこでの経験は、その先延々と続く医師としての登山の通過点でしかなく頂上のみえない山に対する準備でしかない。そこで何を得るかその先にどう生かしていくかが大事なのだと思う。偉そうなことを言ってる自分もまだ麓だ。しっかりと山を登り続けていきたい。